

織物作業で歌われた労作唄

ろうさくうた

労作唄とは民謡の一種で、体を動かしながら作業をする時に歌うことで作業効率を上げたり、複数人で作業する時に歩調を合わせるために歌われたものをいいます。

織物作りが盛んな明和町には、かつて手作業を行う際に歌われた労作唄がありました。今では歌う人もいなくなりどんな歌だったのかわからなくなりましたが、残された歌詞などから当時の手仕事の風景を思い起こすことができます。

○糸のべ歌 江戸～明治頃 *糸のべ：綿花から糸を引き出しのばす作業

1. のべたのべたと 牛の角のべた 明日は但馬へよー うし負いによー
2. こいさ可愛や 嫁こそ子なれ 娘世間のよー 人の子じゃよー
3. 可愛がらんせ わし弟娘やに 親にそうのはよー 夢の間やよー
4. 旦那さまより 奥さまこわい 白目黒目でよー 睨まれるよー

『御絲木綿一木綿のふる郷ー』西村義張 昭和57年

○機織唄

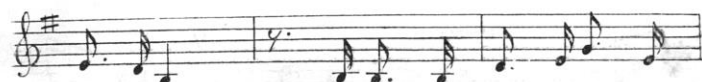
ござったらと おもったら もう帰りかあ
あさぎ（浅黄）染めかな あい（藍）たらん

『労作唄』倉田正邦 昭和31年

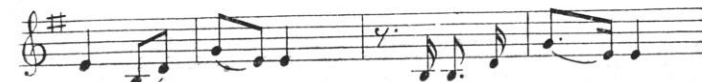
御絲織物株式会社で染められた糸の色
左から①かめのぞき②あさぎ③なんど④紺



のべたのべたはうしのつな



のべたあすはたしまへ



べおーいーに ソウダソウダ

機織りのようす

『広報めいわ』155号
(昭和55年)



キーワード：
織物、糸のべ、機織、労作唄